

## 針ヶ別所村事件

教祖は、文久、元治の頃から始まった近在の神職、僧侶、山伏、医者など外部からの反対攻撃には、“ほこりはよけてとおれ”と、穏やかに対処しておられるのですが、異端・異説（内からの反対攻撃）に対しては、とても厳しい態度で臨んでおられます。

慶応元年7～8月頃、教祖に眼病をたすけられた今井助造が、自分の住んでいる針ヶ別所村（現在の奈良市都祁）が本地（本元）で、おぢば（庄屋敷村）は垂迹（末）であると言いました。この助造事件に臨んで、教祖は先ず30日間の断食をされ、その断食の直後に、当時の主立った大勢の人々をお供にして、御自ら針ヶ別所村の助造宅へ乗り込まれています。

教祖はなぜその時に30日もの長期にわたる断食をされたのか？ その理由についての確たる話は伝わっていませんので、ここからは小生の悟り・解釈ですが…。これは、教祖が異端を糾弾される理由が、“教祖の生活権が脅かされるから云々ではない”ことを、食を断った姿で明らかにされたのだと思うのです。

本家・本元の正当性の争いが起きるのは、お互いの名誉・プライドの問題もさりながら、本家を名乗ることが経済的に優位になるということが第一の理由でありましょう。平たく申せば、勝った方は食えるが負けた方は食えなくなるということです。しかるに、教祖が助造に談判をしに行かれるのは、そんな下世話なレベルの理由からではない。中山家が食べるのに困らないように助造を論破しなければならない、などというのではない。教祖にとっては、食はいかにでも対処できることである。そのことを明らかにするために、出かける前に30日もの間の断食をされたのではないかと思うのです。

医者は自分の患者が奪われることを心配して文句を言いに来た。神職、僧侶、山伏なども、自分たちの信者が取られると心配をして、種々と反対攻撃を仕掛けてきた。いずれも、教祖が自分たちの縄張りを荒らす存在だと考えて、いわば、生活防衛のために教祖に掛け合いに来ました。それについては、普通の理屈から申せば、“自分たちの努力・精進の足りなさを棚に上げて、競争相手を非難するのは理不尽だ”とでも言うべきものであります。しかるに、教祖は、生活をする手立てとして靈験を現されたのではありませんから、生活権のレベルの問題で相手と渡りあうことはなさらない。否むしろ、全ての人間の“をや”として、どんな人にも救いの手を差し伸べられる教祖のお立場からすれば、御自らが現される靈教によって生活に困る人が出てくるのは不本意なことなのです。ですから、たとえば、文久2年に、稲荷下げをする者が金銭の無心に来た時などには、先方の請いに任せて2両2分という大金を与えられたりもしているのです。

さて、そこで助造の異端行為の場合を考えますと、彼の目指したのも、自分の宗教的信条を貫くというよりは、教祖の元に集まった人を横取りして自らの懐を豊かにすることだったと思

えます。その点では、他の人々が教祖に言いがかりをつけてきたのと本質的には変わりがなかったと思われまふ。しかし、助造の異端行為と他の反対攻撃との違いは、助造のことを放置している、と、天理教の教えが誤って世に伝わるということです。

たとえば、天理教のことを全く知らないで、似たような教説を言って何処かで新たな宗派を始める人がいるかも知れない。あるいは、天理教の教理をつまみ食いのように取り入れて、〇〇教なるものを作る人がいるかもしれない。しかし、それらは、天理教に似てはいるけれども天理教ではない。それは他宗教、別の教団であって、そこが天理教を名乗らないかぎりには異端ではありません。異端というのは、“教えにないことや教えに反することを、天理教の名のもとに説く”ということなのです。

世の中には、天理教の教説に同意できない人もいるでしょう。神の存在を認められないとか、宗教心はあっても教団に帰依はしないなどと言う人もいます。しかし、そういう人たちは、天理教の信者ではない未信者、無信仰者だというだけで、異端者ではありません。そして、そういう人たちには、将来何らかの回心体験をして、天理教に帰依する可能性が残されています。しかるに、もし、疑似天理教、異端を天理教だと信じてついでに行ってしまうと、それがその人の天理教なのですから、その人は本物の天理教に救われる機会を失ってしまいます。ですから、異端は許されず、異端を糾弾するのは、生活権云々で争うのとは、全く次元が違う問題なのです。

さて、針ヶ別所村というのは現在の奈良市都祁で、お屋敷から東に20kmの山中にあります。教祖ご一行が通られたのは、岩屋ルートか長滝ルートのいずれかであったと推察されますが、その道筋は、今の時代に自動車でも通っても大変だと感じられる坂道です。その20kmの山道を、30日間の断食の後に、68歳の婦人が徒歩で登っていかれる。まさに、人間業でないという点で、教祖が神のやしろであることが明確に示されています。しかるに、他方、教祖も人間としてのお身体をお持ちなのですから、そういう過酷な状況に身をおかれて、いわば、命がけで助造の異端と対決されたということが、当時の人々の心に焼き付いたのではないかと思うのです。

人間には心の自由が許されていますから、いつの時代にも異端を唱える者が出る可能性はあります。そして、その首謀者には、それなりのカリスマ性があり、人の心理の緩に入り込む才に長けています。そういう人物は、こちらに迷いがあつたり欲の心があつたりすると、巧みにそこをついてきますから、うかつな気持ちで近づくと、ミイラ取りがミイラになる危険性があるのです。ですから、もし異端と対決しなければならないのなら、こちらも決して中途半端な姿勢で臨んではならない。断食をして心を研ぎ澄まして、大勢の随伴者と共に対峙すべきであると、助造事件に臨まれた教祖の御態度“ひながた”に学ぶのであります。